# Vol.164　集落や団地の小スーパーを守る必要性を！(平成21年7月25日)

今、全国各地で大型店が出店して、その土地の資産、歴史伝統、景観までもむしりとり終わると儲からないからと去って行きます。草も木も生えなくなった跡にはシャッターを閉じたままの廃虚の様な商店街が残ります。

そして田舎の集落でも、団地でも毎日の食料品、日用品を買う店がなくなってしまったと嘆く声が聞こえます。かつて全国には中小スーパーは１５０万店ありましたが大型量販店の進出によって５０万店も中小スーパーは消えてしまいました。１５０万店あった頃は凡そ３００m位歩けば買い物が出来ました。歩いて暮らせる町や村でしたから、ご近所とのよきコミュニケーションの場であり、安心安全も共有した便利な大切なエリアでありました。

この小さな商店がなくなった今は、3kmから5kmほど車で行かないと、毎日の食料品も日用品までもが買えなくなってしまいました。更に高齢者、少子化時代を迎えましたのでその不便さは深刻であります。全国的にも過疎地では村が消滅して居ります。

今までの「まち作り」は社会資本の充実、資産価値を守ることが主でありますが、これから市民の生活圏を守るための働きかけを多くの消費者の方達にも理解、協力して頂く時を迎えて居ります。

全国の対策事例をいくつか調べて見ますと、すでに廃業した施設、廃業を予定している店舗を市民が出資して再建して成功した事例がいくつもあります。これらを参考にして、君津の在り方を考えますと、幸い君津は背景に豊かな農耕地を持っておりますので、店作りには消費者、商業そして生産者の方達にも出資して頂き、市も指導、支援する新しいストアー方式（自分達で作った生鮮品から手工芸、惣菜を直販する方式）をおすすめしたい。

運営は出店者の中から社長、取締役を選び、出店者としても参加されて・・・今この地に住む人達の多くはこれからも生涯をこの地に託して行く人達であります。この住むまちも集落も捨て切ることのできない街であり、集落でありますから、次の時代の人たちの為にも育んで残して行かなければならないものであります。

この事の成否は他力本願でなく、自分達の夢や願望は自分達で作ることで満足感が生れるものであります。

大型店は一見市民消費者に安価な商品を大量に提供することによって豊かな生活をと謳いますが、所詮、市場独占主義ですから、地域社会に絆は生まれないのであります。

房総の地は昔から天の時、地の利に恵まれてタナボタ恩恵によって豊かな郷土を築いて参りましたが、これからはタナボタ恩恵を待っていたら他人にさらわれてしまいます。

南房総へ観光出入人口三千万人が予想されています。今度こそは先手、先手の勇気、決心が必要であります。後に続く人達のために、座して死ぬ愚かな選択は避けなければなりません。

次号は―村のストアーと観光客への対応―を書いてみたいと石川県を歩いて参ります。